

# ひやみかち節 直筆の詩発見 名曲「米で作詞」裏付け

「ひやみかち節」の歌詞となった琉歌を詠んだ平良新助直筆の同琉歌を含む詩がこのほど、作曲者・山内盛彬の遺品から発見された。盛彬はコラムに、平良がロサンゼルスにいた頃、ハワイの僧侶・玉代勢法雲から平良の詩を渡され作曲したと記しており、その時の詩と思われる。名曲誕生のきっかけとなった貴重な資料といえる。大里康永著「平良新助伝」では、平良が1953年に沖縄へ帰郷した際に古里の復興を願うこの琉歌を詠んだと記されているが、今回見つかった詩には「於北米」と記され、ロサンゼルスで詠まれたとする盛彬のコラムを裏付けている。(伊佐尚記)

盛彬のコラムは61年に沖縄タイムスに掲載され、「山内盛彬著作集」第3巻に収録されている。平良の詩は盛彬のひ孫・盛貴さんが2013年ごろに見つけた。筆跡と署名から平良の直筆と分かる。歌詞の右上に別の筆跡で「山内様 御添紙の上御読み下さい」とあり、署名はないが、盛彬のコラムから玉代勢が書いたと推測される。

盛貴さんは「沖縄戦の犠牲者の冥福を祈った上で」この「東は逆巻く太平洋」といった言葉は「平良新助伝」に収録されている「沖縄を偲ぶ 噫沖繩死か生か 於北米」という平良の詩にも見られ、これらが同時期に詠まれた可能性がある。どちらか戦争で焦土と化した沖縄を憂い、復興を願う内容だ。

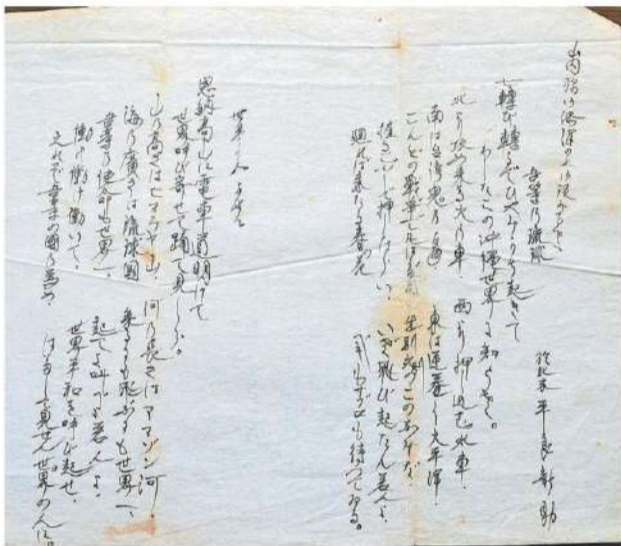
山内家には複数の「ひや



平良新助(平良新助伝より)



山内盛彬(山内盛貴さん提供)



山内盛彬が玉代勢法雲から受け取ったと思われる平良新助直筆の詩。冒頭に「ひやみかち節」の歌詞になった琉歌がある(山内盛貴さん所蔵)

**用語** ひやみかち節 自由民権運動や海外移民に功績を残した今帰仁村出身の平良新助が詠んだ琉歌に、現那覇市首里出身の音楽研究者・山内盛彬が曲を付けた。2番以降の歌詞は盛彬が作った。後に民謡唄者らも歌詞を付け加え、県民に広く愛唱されている。

「ひやみかち節」の楽譜が保存されているが、年代が分かる最古の楽譜は52年のものだ。これからは平良が53年に

この琉歌を詠んだという説は誤りだといえる。  
紙芝居「平良新助物語」の脚本を書いた「ひやみかち今帰仁・移民校の会」の大城茂樹事務局長は、発見された詩について「(沖縄で詠んだという説にのっとった)紙芝居の粗筋と異なってしまうが、平良を研究する上で重要な資料であることは間違いない。当時、北米から沖縄救済運動が広がったことを考えても、平良が北米にいた時に詠んだ可能性はある」と話した。



山内盛彬の膨大な遺品(手前)を保管しているひ孫の盛貴さん＝那覇市の自宅

## 盛彬の資料、ひ孫が保存

### 山内盛貴さん 未発表歌詞も

琉球王国時代の音楽の保存などに多大な功績を残した音楽研究者・音楽家の山内盛彬が残した膨大な資料を、ひ孫の盛貴さんが保管している。盛彬が書いた未発表と思われる「ひやみかち節」の歌詞もある。盛貴さんは「将来はデジタル化してインターネット上にアーカイブスを作り、一般にも公開したい」と話す。

資料は楽譜やメモ、スクラップブック、講演用資料本など。盛彬はちらしの裏に楽譜やメモを書く習慣があったという。

未発表とみられる「ひやみかち節」の歌詞は、スクラップブックに貼られている。「あれがな荒れて転んで又起きて やがて咲き出る 花の文化(荒れに荒れて 転んでまた起き上がる) やがて咲き出るのは 花のような(沖縄の文化だ)」「平和代や搾られ 軍代や戦場 いつも浮ばらぬ わした沖縄(平和な時代は搾取され 戦時下では戦場になり いつも浮かばれないのは 私たちの沖縄だ)」といった歌詞がある。

同じスクラップブックにある「マウチュウ節」(盛彬作詞・作曲)という曲は、ねずみを題材にしたユーモラスなもので、盛貴さんも「初めて見た」と語る。そのほか、工工四で書かれた題名のない曲もある。

盛貴さんは「残された資料を整理し、盛彬がやり遂げられなかったことを研究していきたい」と話している。

## 誕生の謎迫る一次資料

解説

山内盛彬の遺品の中から発見された平良新助直筆の詩は、「ひやみかち節」誕生の経緯や時期について複数の説がある中、真相を探る貴重な一次資料だ。

盛彬は「ひやみかち節」作曲の経緯について2通りの説明を書き残している。

1961年のコラムでは、盛彬が東京にいる時、玉代勢法雲から平良の詩を渡され作曲したと記している。

一方、「私の戦後史」第4集(81年)では、盛彬が48年に沖縄に一時帰郷した際、役者の親泊興照から頼まれ「ひやみかち節」などを作曲したと記している。

早い時期に書かれた前者の方が記憶が鮮明だと思われる。発見された詩とも合致する。

盛彬のひ孫・盛貴さんは「盛彬は基本的に東京の自宅で作曲していたので、『ひやみかち節』も東京で作曲したと思われる。その

後帰郷した際に新曲を依頼され、『ひやみかち節』を提供したのではないかとみている。

発見された詩には「恩納高山に 電車道明けて 世界呼び寄せて 踊て見しら」という琉歌も記されている。この琉歌は、今帰仁村歴史文化センターが所蔵

する平良の手帳に、48年に「50年後の沖縄を表現」して詠んだと記されている。そのため、「ひやみかち節」の歌詞になった「七転び」の琉歌も同年以降に詠んだ可能性がある。作詩、作曲の時期についてさらなる研究が必要だ。

また、「平良新助伝」では、平良が帰郷後に「七転び」の琉歌を詠んだとする箇所ほかに、平良自身が1903年当時の当山久三の思い出を書いたコラム(執筆年不明)でも「半世紀前の当山を偲び(中略)一首ものして彼の遺志に応えん」として「七転び」の琉歌を記している。平良は北米在住時にこの琉歌を詠んだと思われるので、このコラムの「半世紀前」は「約半世紀前」という意味か、あるいは北米在住時に詠んだ琉歌を後から当山に当てはめたのかもしれない。